



スピーキング・テスト の採点はどうする

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 広まるスピーキング・テスト

「聞くこと・話すこと」を中心とした中学の英語教育では、その評価を「紙と鉛筆のテスト」だけで行うことは整合性がないだろう。いくら授業中一生懸命話していても、それは評価されないことになってしまうのだ。しかしながら、近年は（とりわけ、絶対評価の導入後は）、授業観察が強調されたこともあり、「話すこと」の評価がずいぶん頻繁に行われるようになってきている。この場合は、もっぱら教室での様々なスピーキング活動を「観察評価」しているわけであるが、実は「テスト」による評価もここに来てかなり増えてきているように思われる。ただ、せっかく広まりつつあるスピーキング・テストであるが、問題がないわけではない。その問題は、スピーキング・テスト自体の問題と採点の問題とに大きく分かれる。スペースの都合で、今回は、採点の問題に焦点を当て、スピーキング・テスト自体の問題については、次号で扱う予定である。

2. スピーキング・テストの採点

スピーキング・テストの採点には、誰が採点するかという問題とどう採点するかという問題がある。

2.1. 誰が採点するか

スピーキング・テストの採点を誰が行うかと言った場合、単純には教師自身ということになるように思われる。しかし、実際にはALTに任せているという例が意外と多い。英語のネイティブ・スピーカーが採点するというのは、一見すると妥当な判断のよ

うに思われる。しかし、必ずしもうまく機能しているわけではない。それは、いわゆる「ALTへの丸投げ」というケースである。つまり、採点は（そして、多くは面接も）すべてALTが1人でやっているのである。もちろんALTが採点してうまく行く場合もあるが、それは担当の日本人教師が、そのときのスピーキング・テストの目的や評価基準を十分に伝えている場合である。ところが実際には、丸投げを行っている日本人教師は、往々にしてALTと十分なコミュニケーションがとれていないことが多いのである。

スピーキング・テストの目的や評価基準を十分に伝えていないと、ALTは自分の持つ基準で採点してしまう（しかも、これがいつも「発音」や「流暢さ」であったりする）ので、結果的には「しゃべれる子はいつでもしゃべれる」となっていることが少なくない。つまり、本来の評価基準への到達の有無に関係なく、採点が行われてしまっているのである。

実は、日本人が採点している場合でも、無意識のうちに「評価基準」と異なった基準で採点してしまっていることがあるので、注意が必要である。誰が採点するのであれ、指導目標との整合性は常に心がけなければならない。

また、ALTが採点するかどうかという問題以外に、スピーキング・テストの実施者が採点者を兼ねるかどうかも大きな分かれ目である。一般に、スピーキング・テストを実施しつつ、信頼性の高い採点を行うことは難しいとされる。それは、多くの場合、テストの実施に気を取られて、採点に十分な注意が向けられなくなってしまうからである。もし諸般の事情で、採点者がテストの実施者を兼ねなければならない場合は、以下に述べる「全体的採点」を行うか、

また、「分析的採点」を行う場合でも、その観点の数をかなりしぼる必要がある。

2.2. どう採点するか

スピーキング・テストの採点方法は、大きく分けて2つある。1つは「全体的採点 (holistic scoring)」であり、もう1つは「分析的採点 (analytic scoring)」である。前者は、受験者の行動を全体的に捉えて採点する方法であり、後者は、それをいくつかの観点に分けて、分析的に採点する方法である。以下、それぞれの方法について考察する。

まず、「全体的採点」である。この方法ではその目的によりいくつかの段階に受験者を分類するが、その際には、それぞれの段階の行動の特徴が記述されたバンドを用いる。このバンドの記述には、課されたタスクにより、「発音」や「文法的正確さ」「内容」など様々な観点が含まれるが、特徴は、複数の観点が1つのバンドの中に入れられている点である。

この方法を「印象主義的採点 (impressionistic scoring)」ということがある。しかし、いわゆる「印象」によって、「よくできる」のでA、「中ぐらい」なのでB、「あまりよくできない」のでCなどと判断しているわけではないので、この呼び方はやや誤解を招くかもしれない。

この「全体的採点」では、あたかもこれら複数の観点が「手と手を取り合って、仲良く」発達していくという想定 (holistic-universal view) のもとにあるということは認識しておいた方がいいだろう。つまり、例えば、「発音」がよい生徒は「文法」も正確で、「語彙」も豊富というような想定である。例えば、「バンドC：強弱のリズムの習得がまだ充分ではなく、現在進行形の文を正しく作れないこともある。また、単語の選択にも時々誤ることがある。」というような具合である。こうした前提が崩れない限りは、「全体的採点」は、採点者側としては、簡便なよい方法ということができるかもしれない。

これに対して、「分析的採点」では、複数の観点が立ち、その観点ごとに採点していく。このため、一般に、「全体的採点」に比べ高い信頼性が得

やすいと言われている。また、学習者へのフィードバックも診断的な機能を持たせやすい。

ただ、このようなメリットを実現するには、いくつかの注意が必要である。まず、「観点の独立性の問題」である。例えば、「発音」と「文法的正確さ」という観点が立っていたとすると、「発音のよさ」にまどわされずに、「文法的正確さ」を判断しなければならない。次に、どのような観点を立てるかである。ここで立てる観点は、当然のことながら、指導目標に適合していなければならない。さもないと、評価は指導目標とまったく異なった観点でなされてしまうことになる。これは、上で述べた「ALTへの採点の丸投げ」にも起因することである。さらに、その観点の数も問題である。1つのテストであれこれ見たいという気持ちは分からないではないが、そう多くの観点を高い信頼性を持って見ることはできない。とりわけ、定期試験などでは、毎回評価基準が異なるために、採点者がそれぞれの基準に徐々に習熟していくというわけには行かない。であれば、本当に見たい観点到しぼって見る必要がでてくる。

例えば、「話すこと」において、現在進行形が使えるかを見たとする。タスクは、校庭で5人の生徒がいろいろなことをしている絵を見て、それを描写するものとしよう。「言語的正確さ (現在進行形の使用)」と「発音の正確さ (強弱の適切なリズム)」という2観点の基準は次のようになる。

	言語的正確さ (現在進行形)	発音の正確さ (強弱のリズム)
A	5文すべて正確	5文すべて正確
B	3, 4文が正確	3, 4文が正確
C	0, 1, 2文が正確	0, 1, 2文が正確

こうした基準をもとに、それぞれの観点で判断するわけであるが、もちろん文の数といった「量」での記述でなく、「質」での記述をすることもありえる。いずれにしても、評価の基準となる具体的な行動を記述しておくことが重要である。